

グローバル化時代における現役中学生の英語学習への取り組み —授業への希望と自己学習アンケート調査を中心として—

坂本育生

諸言

2020年は、いよいよ正式教科科目としての小学校英語教育が始まり、日本の英語教育の歴史において、記念すべき画期的な年となります。さらに引き続いて、2021年度には中学校、2022年度には高等学校において新しい学習指導要領による英語教育が始まります。このように現在の日本の英語教育は、21世紀のグローバル化の時代において、文字通り前代未聞の歴史的な転換期(turning point)を迎えています。

ところで2019年秋には文部科学省の突然の決断によって、各種民間英語検定試験の大学入試への導入が先送りされましたが、5年後の2025年度からは、民間英語検定試験の導入が予定されています。そこで本研究は、小学校と中学校、さらには高等学校への橋渡しとなる現役中学生に焦点を当て、2019年12月に鹿児島市内のある公立中学校で実施した、現役中学生への実態アンケート調査をデータ基盤として、今後の小・中・高の英語教育の連携強化を図るべく、現役中学生の英語教育への期待とその現状を考察します。註1)

また文部科学省が求めている、中学校の英語教育現場での「英語による英語の授業の実施」に対する現役中学生の意見等も客観的に述べます。詳細は本論で説明しますが、現状においては、中学校での「英語による英語の授業の実施」はかなり困難と思われる。

キーワード：グローバル化、現役中学生の英語学習実態、英語による英語の授業、英語資格試験

1. 2020年以降の転換期における日本の英語教育の現状

緒言でも述べましたように、2020年は二度目の「東京オリンピック・パラリンピックイヤー」としてのみならず、日本の英語教育の歴史において、極めて重要な年となり、将来も語り継がれることになるでしょう。その理由は、これまで「総合的な学習に時間」および「領域」として教えられていた「小学校英語活動」が、今回は5、6年生のみに限定されますが、小学校での正式教科として教えられることになるからです。確かに導入に対しては、未だに多くの問題と疑問点が多く、賛否両論があります。しかしながら、既に中国や韓国、台湾などのアジア各国だけでなく、世界中の多くの国々が、小学校での低学年時において、所謂、国際語の言語コミュニケーションのツールとして早期英語教育を採用していますので、日本の早期英語教育の実施においても、その成功を目指し、英語教育関係者は、最善の努力をすべきでしょう。

このように小学校での早期英語教育が広く論じられる一方において、2021年度からは中学校において、さらに2022年度からは高等学校においても、新学習指導要領に基づいた新しい英語教育が始まり、同時に教科書もかなり変わります。そこで本稿においては、小学校と高等学校の間に位置する中学校において、現役公立中学生に対しての実態アンケート調査を実施し、中学生の現在の英語学習の現状を把握しつつ、今後の21世紀のグローバル化の時代における日本の英語教育の実施のための一つの指針を提言することを目指しています。特に注目すべき項目は、文部科学省が高等学校に続いて、中学校においても求めているところの「中学校での英語による英語の授業の実施」に対して、現役中学生がどのように考えているのか、また最近のインターネットやICT教材を、現役中学生がどのように使っているのか、さらには現役中学生が英語の授業に対してどのような内容の授業を求めているのか、自己学習はどのように行っているのか等の項目を調査分析し、そのデータ結果を論じて行きます。註2)

2. 現役中学生への実態アンケート調査分析

本稿のアンケート実態調査は、2019年12月に、筆者が指導教員を務めた鹿児島大学教育学部英語科中等コース4年生の2019年度の卒業論文作成のデータ収集をひとつの目的とし、鹿児島市中心部に位置する公立K中学校の、1年生106名全員、2年生125名全員に実施したアンケート調査に基づくものです。K中学校は、特別の国立大学附属中学校や、英語教育に特に力を入れた私立中学校というわけではなく、一般的な公立中学校です。そのために、特殊な家庭環境の事例ではなく、まさに日本の地方中規模都市の平均的な一般家庭の現役中学生の英語学習の現状を反映していると言えるでしょう。アンケート調査の内容とそのデータの詳細は、(註)の後ろのAppendixに挙げておきました。なお本稿では紙面の制限もありますので、特に注目すべき3項目に焦点を当てて、そのデータ結果を分析します。

2-1: 英語の好き、嫌いに関するデータ結果分析

1年生のデータ分析においては、「好き、まあまあ好き」を合わせた「好きな分類」に入る学生は、105名中72名(約68.7%)となり、一方「あまり好きではない、嫌い」を合わせた「嫌いな分類」に入る学生は、105名中33名(約31.4%)でした。つまり1年次後半の時点においては、「英語が好きだ」とする学生の割合が、全体の2/3あまりとなり、「英語が嫌いだ」とする学生の割合の、実に2倍となっています。

一方、2年生125名のデータ分析は、「好き、まあまあ好き」を合わせた「好きな分類」に入る学生は、125名中73名(約57.6%)となり、「あまり好きではない、嫌い」を合わせた「嫌いな分類」に入る学生は、52名(約42.4%)となりました。つまり今回の調査結果では、1年間の英語学習の後、所謂「英語好き」の割合が、68.7%→57.6%と、実に10ポイント以上も低下したことになります。この種のアンケートの調査では、通常学年が進行するにつれて、次第に学生が学習しなければならない難しい文法項目が増えて来ますので、所謂「英語嫌い」な学生の比率が高まってゆく傾向が常に見られま

す。今回の調査でも、英語教育関係者としては大変残念なことに、従来の調査と同様の結果となりました。特に一般的に「英語嫌い」が増えて行く時期は、中学2年次において、受け身や現在完了等の「過去分詞」を使った文法事項が出てくる時期に見られます。調査を実施した12月の時期は、正に中学2年生がこのように「過去分詞」を学習する時期か、若干過ぎた時期ですので、「英語嫌い」の学生が増加した、と言えるかもしれません。

このように、中学2年次後半において英語嫌いが増える傾向は、英語教育に関わる全ての者が、日頃から強く心がけておくべきことです。文部科学省の指導にもあります「英語嫌いを作らない」ということは、非常に難しいことではありますが、英語教師としましては、ベストを尽くして「英語嫌い」の学生を作らないように、日頃から心がけておきたいものです。正に英語教師永遠の課題と言えることでありましょうが、所謂モチベーションの維持、特に外からの刺激による「外発的動機付け(extrinsic motivation)」ではなく、自ら学ぼうとする「内発的動機付け(intrinsic motivation)」を学習者に指導したいものです。

2-2：授業中の英語：日本語の使用頻度の割合についてのデータ分析と今後の見解

1年生においては、ちょうど英語・日本語が半々を希望する学生が、105名中17名(約16.2%)となり、英語・日本語の比率が4対6、もしくは6対4の範囲内を希望する学生は、105名中68名(約64.8%)となりました。また7対3もしくは3対7の比率の範囲内を希望する学生は、105名中91名(約87%)となりました。

一方、2年生のデータ結果は、半々を希望する学生が125名中25名(20%)、4対6、もしくは6対4の範囲内を希望する学生は、125名中58名(約46.4%)でした。また7対3もしくは3対7の比率の範囲内を希望する学生は、125名中93名(約74.4%)となりました。なお学生からの回答において、若干不鮮明な点もありましたので、少しデータがずれている場合もありますが、概ね1、2年生の両方において、英語と日本語を併用した授業を求めているように思われます。今回のデータによりますと、特に一般的な公立学校の教師としましては、日英語のどちらかには極端に偏らないように心がけて、日頃の指導をすべきと思われます。

ところで文部科学省は、高等学校においては、既に平成26年(2014年)度頃から「原則として英語の授業は英語で実施するように」と全国の高等学校に求めています。もともと、実際には日本の高等学校の現状としては、かなり学校格差がありますので、実際の教育現場では、先生方は非常に困っておられます。実際に全国の多くの高等学校におきましては、高校生といっても、英語レベルは中学校終了レベルといわれる英語検定3級に満たない高校生も多数見られます。今後の文部科学省の指導としましては、かなり以前に文部科学省が訴えた「英語が使える日本人育成のための戦略構想」の実現のためには、資格検定試験への経済的な補助などを含めて、まずは中学生全体の英語力レベルの向上を図る必要があると思われます。

中学生・高校生の英語力の向上が望まれる一方において、現場の中学・高校の英語教師の英語力の向上も求められています。全国の都道府県や都市部と農村部によってもかなり異なりますが、適切な

英語運用能力保持者と評価される英語検定準 1 級、もしくはそれと同等とされる TOEFL、TOEIC、IELTS 等の英語検定試験資格を有する高校教師は、鹿児島県においては 45% あまりしかなく、中学校においてはさらに低い 27% です。註 3) 確かに英語の先生自身に英語力がなければ、中学生、高校生に対して適切な英語の指導が出来るとは思えませんし、英語の実力のない先生には、生徒もついてこないでしょう。そのために多くの教育委員会が、英語教員採用試験に際し、各種検定試験の資格取得者に対しては、一定の加点をする制度を設定しています。英語教師自身の英語力改善の取り組みに対しては、今後も注目する必要があるでしょう。註 4)

ところで 2021 年度から実施予定の中学校新学習指導要領においては、中学校においても英語の授業は英語で実施することを求めています。この件に関しては、以前から多数の賛否両論があり、なかなか困難な問題です。註 5) 筆者の個人的見解としましては、中学校での英語授業の英語による実施には、全面的には賛同できません。以下にその理由を述べます。

高等学校は、確かに現在の高校進学率は日本国民全体の 100% に近く、ほとんどの日本国民が進学していますが、厳密には義務教育ではありません。従って、学習者の英語力育成のために、英語力に秀でた学生に対しては、英語の授業を英語で行うことは、場合によっては可能でしょう。しかしながら中学校は義務教育であり、全ての日本国民や、場合によっては外国人居住者も通うことになります。また日本における英語教育体制は、外国語の一つとして英語を教える TEFL (Teaching English as a Foreign Language) であり、日本における公用語は日本語です。つまり、昔イギリスやアメリカの植民地であったインド、フィリピン、英語圏アフリカ諸国で行われているような、第二言語 (第二公用語) としての英語教育 (TESL: Teaching English as a Second Language) による教育委体制とは根本的に異なります。その点を誤解している中学・高校現場での ALT (Assistant Language Teacher) も結構多く、現場に指導助言に行く際に、TEFL と TESL の違いを説明することもしばしばあります。註 6) 以上の理由から、今回のアンケートデータが示すように、中学校において英語の授業を英語で行うことは、現役中学生はあまり望んでおらず、かなりの困難を伴うと思われ、場合によってはむしろ学力の低下や英語嫌いの生徒を作ってしまうかもしれません。現場の学校の先生方は、くれぐれも慎重に対処して下さることを希望いたします。註 7)

2-3 : 英語に触れる機会 (方法) についてのデータ結果および分析

昨今のパソコンやインターネット関連の ICT 教育の普及により、今回の実態アンケート調査によって、現役中学生が英語に触れる機会やその方法も、従来と比べてかなりの相違があることが判明しました。詳細は Appendix のアンケート実態調査結果に記述してありますのでご参照ください。特に注目すべき点は、従来にはなかったインターネットや you tube 等の利用が中学生においても増えていることです。インターネットと you tube の利用者は、1 年生で合わせて 29 名、2 年生では実に 53 名に足し、かなりの数値となっています。現場の英語教師もうかうかしてはいられません。また今回は調査項目には入れませんでした。スマホを所持している中学生、高校生も増加していると思われるので、今後もその動向を調査する予定です。

インターネットや you tube の利用に加えて、塾や音楽、TV 等も利用されており、特に英会話の塾や学校に通っている事例も見られます。ところでテレビは、昔の NHK 教育テレビ（現在の E テレ）の利用を薦めています。E テレを視聴している人は、あまりいないと思われませんが、E テレは語学教育教材の宝庫です。また他の地上波や衛星放送においても、言語の切り替えにより、英語その他の言語によるオリジナル音声も視聴出来ます。特に相撲やメジャーリーグ野球中継、海外サッカー中継等もオリジナル言語教育媒体として利用可能です。

しかしながら、英字新聞やラジオを利用している事例は、今回の 1、2 年生の合計 230 名あまりにおいて、10 名にも満たず、利用はほとんどありませんでした。確かに中学生にとっては、英字新聞や英語の雑誌類はかなり難しいでしょう。また NHK ラジオの第二放送を聴く学生も、最近ほとんどいないと思われませんが、第二放送はまさに語学教育番組の宝庫で、テレビと違って様々な場所での利用が可能で、音声にも集中できます。特に週末には、ウィークデーのダイジェストや集中しての番組の再放送がされていますので、英語に限らず独語、仏語、中国語等の多言語学習にも、大いに活用していただきたいと思います。筆者自身も古くはラジオ基礎英語、続基礎英語、さらには古くは松本亨先生、東後勝明先生、大杉正明先生方のラジオ英会話等の語学番組を利用して学習を続けて、今でもラジオでの英語やフランス語、ハングル講座等を利用しています。若い学習者の方々も、時には古いアナログ媒体を利用してほしいものです。

3. 2020 年以降の日本の英語教育の展望とグローバル化対応への期待

2019 年のアジア最初の「ラグビーワールドカップ大会」に続き、2020 年夏には二度目の東京オリンピック、パラリンピックが開催され、多くの外国人訪問者が予想されます。さらに 2025 年には、これも二度目の「大阪（関西）万国博覧会」が開催され、2020 年以上の海外からの訪問者が予想されます。引き続いて 2030 年には、これも二度目の「札幌冬季オリンピック・パラリンピック」の開催を札幌市が表明しており、正に日本では国際イベント開催が続きます。2018 年時点での外国人来訪者が 3000 万人を超え、日本政府としては、2020 年には 4000 万人の外国人来訪者を期待しているとの表明がしばしば報道されます。最近の日韓関係の悪化や新型コロナウイルス感染発生等の事態もありますが、社会的傾向としては、このグローバル化の現状は、21 世紀の国際的動向として持続することが予想されます。

ところで、近年の人口減少と高齢化、労働力不足に悩む現代日本社会においては、外国人労働者の流入も際立ったものがあり、将来の日本の農業は外国人労働者なくては維持できないであろう、と予想されています。具体的な数値としましても、国境を有さない島国日本ですが、現在の日本全国の国際結婚の割合が 5% 余りに達し、東京都に限れば国際結婚の割合は何と 10% に及んでいます。このようなグローバル化著しい現代日本において、将来の日本社会を維持してゆく手段として、グローバル化社会に対応してゆくことは不可欠のことと思われる。もちろん英語のみが外国人とのコミュニケーションの手段ではありませんが、事実上の国際語で、「世界中の人々とのコミュニケーションのツール」、いわゆる「リングフランカ」の役割を果たしている英語による日本人のコミュニケーション能力の改善は、英語教育関係者にとっての切迫した重要課題と思われます。註 8)

2020年度以降から始まる小学校、中学校、そして高等学校での英語教育の改善が、グローバル化ジャパンの実現のために役立ちますことを切に望んでおります。

(註)

註1) アンケート実態調査の実施の際には、K 中学校の校長先生、教頭先生、並びにご協力いただいた先生方に対して、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。なお3年生は、高校受験を控えた大切な時期でしたので、今回のアンケート調査の対象からは外しました。アンケート対象学生数は、1年生全員106名、2年生全員125名ですが、アンケート項目に回答しなかった場合もありましたので、母体総数が多少全員の人数に満たない場合があります。なお、この種の無記名アンケート調査にはしばしば見られますが「日本で英語はいらぬ、なぜ学ぶのか」という意見も若干ありました。この種のコメントは特に赤の表記をしています。

註2) K 中学校は一般的な公立中学校ですが、英語教員の英語指導レベルは非常に高く、筆者が審査員ジャッジを担当させていただいております。鹿児島市教育委員会主催の「鹿児島市中学校スピーチコンテスト・スキットコンテスト」においても毎年好成績を挙げられ、特に2019年秋のスキットコンテストでは、K 中学校の代表が、附属学校や私立中学校を抑えて、見事に優勝されました。一般の公立中学校において、努力の結果が見事に結実した結果と思われまます。

註3) 2014年11月20日付けの「朝日新聞記事」による統計です。文部科学省が求めるレベルに達している英語教員の割合は、全国平均で、高等学校で53%、中学校では28%にすぎません。因みに東京都の数値は、高等学校63%、中学校41%、鹿児島県は高等学校45%、中学校27%となっています。最も高い数値を示しているのは高等学校で香川県の82%、中学校で富山県の47%となっており、当時の数値では中学校で50%を越えた都道府県はありませんでした。現在は改善されているかもしれませんが、学校教員の仕事の多忙化は最近特に際立っていますので、今後の職場環境の改善が強く望まれます。孔子が唱える論語には、「その身正しければ令せずして行われ、その身正しからざれば、令すとも行われず。」とあります。英語教師にしっかりとした英語力があれば、自然に生徒もついてくるでしょうし、教師に英語力がなければ、いくら言っても生徒は教師の指導に従わないと思われまます。

註4) 因みに筆者が大学で授業を行う際には、特にスピーキングを中心とした「英語オーラルコミュニケーション」関係の授業においては、All English time の時間帯と、日本語を交えた Explanation time に厳密に分けて、授業を実施しています。受講生にとっては、教師が日本語を理解できることが予め分かっていると、どうしても日本語に頼る傾向がありますが、All English time の時間帯においては、日本語の使用を認めずに、英語でのコミュニケーションを図るように努力させています。時間帯を厳密に区別して指導するこの方法は、高等学校においても、出前授業などで推奨しております。また All English time で理解できなかった箇所は、その後の日本語を交えての Explanation time に、日本語を交えて説明するようにしています。特に2020年度からの新しい大学入学資格試験におきましては、英語では従来の reading 200点、listening 50点から、その比率が原則として1対1に引き上げられますので、高等学校の受験指導として、リスニング力の指導強化が望まれるでしょう。なお筆者は、一応実用英語検定試験1級と英語通訳資格(通訳技能検定英語部門2級)を取得しておりますので、中学校・高等学校での英語授業指導助言

のための英語によるコミュニケーション能力および通訳・翻訳能力は有しております。

註 5) 詳細は参考文献等を参照してください。

註 6) TEFL と TESL の混同は、母国語以外の言語を習得する際の「第二言語習得」を意味する SLA(Second Language Acquisition)に由来すると考えられます。誤解を避けるためには、「外国語習得(FLA: Foreign Language Acquisition)」とすべきかもしれませんが、本稿ではあまり深くは立ち入らず、議論は別の機会に譲ります。データなどの詳細は参考文献を参照してください。

註 7) 筆者自身は、確かに英語教師を職業としている一人の大学教授であります。決して英語一辺倒のいわゆる「英語帝国主義者」ではありません。外国語教育の目的としては、世界の人々との実用的なコミュニケーション能力の育成という側面もありますが、それと同時に文化的・教養的な側面もあります。外国語の学習や習得は、だれにとっても困難な作業ですので、ヨーロッパが目指す多言語主義が、日本でも推進できればと考えています。その件につきましては、また別の機会に論じます。

註 8) 日本の国際化の現状のデータに関しては、参考文献を参集してください。

参考文献

- 安藤昭一編集(1991)『英語教育 現代語キーワード辞典』、大阪：増進堂、
- 樋口晶彦、島谷浩編(2007)『21 世紀の英語科教育』、東京：開隆堂出版
- 松川禮子、大下邦幸編集(2007)『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携—』 東京：高陵社出版
- 根岸雅史、酒井英樹他(2014)『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』、ベネッセ教育総合研究所
- 大津由紀夫(2005)『小学校での英語教育は必要ない』 東京：慶應義塾大学出版会
- 大津由紀夫編集(2006)『日本の英語教育に必要なこと』 東京：岩波新書
- 坂本育生(2011)『水産学部専門英語に関する基礎研究』、鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)、No.35 pp.37-48
- 坂本育生(2012)-a『ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として (Ⅱ)—』— 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)
- 坂本育生(2012)-b『ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として』 鹿児島大学教育学部実践研究紀要、No.22、pp.83-90
- 坂本育生(2016)『鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究 (1)』、鹿児島大学教育学部研究紀要、第 67 巻
- 成美堂出版社編集部(2020)『今がわかる時代がわかる 世界地図 2020 年版』 東京：成美堂出版
- 鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないか』、東京：岩波新書
- 鳥飼玖美子(1999)『異文化を越える英語 日本人はなぜ話せないか』、東京：丸善
- 山田雄(2005)『日本の英語教育』、東京：岩波新書
- 山田雄一郎(2006)『英語力とは何か』、東京：大修館書店

(Appendix 1) K 中学校実施の英語教育実態アンケート調査内容

- (1) 英語の授業は好きですか、それとも嫌いですか？
(A)好き (B)まあまあ好き (C)あまり好きではない (D)嫌い
- (2) (1)の理由を具体的にお答えください。
(回答例：海外に興味があるから、英語を使って話したいから、英語に苦手意識があるから等)
- (3) 英語の授業の中で、楽しいと感じる活動は何ですか？(複数回答可)
(A)読む活動 (B)聞く活動 (C)話す活動 (D)書く活動
- (4) 学校の授業以外で、英語に触れようとしていますか？
(A)意欲的に触れている (B)まあまあある (C)時々ある (D)ほとんどない
- (5) 英語に触れるのは、具体的にどんな時ですか、また、複数の回答がある時は複数お答えください。
(例：塾に通っている、テレビやラジオの英語講座、インターネットや you tube を見る等)
- (6) 英語の授業で理想の英語と日本語の割合はどのくらいだと思いますか？(例：50：50)
英語：日本語(：)
- (7) (6)の理由は何ですか？(例：もっと英語に慣れたい、英語ばかりだと授業がわからない)
回答欄：
- (8) 次の中で、英語の授業で一番楽しい内容は何ですか？上位3位まであげてください。
(A)文法説明、(B)新出英単語、熟語説明 (C)英作文 (D)アクティビティ (E)読解
(F)音読、(E)英会話、対話 (F)その他)
1位： 2位： 3位：
- (9) 英語の授業で、あなたがもっとも身に着けたいことは何ですか？(例：英会話力、英検等の資格、異文化理解)
回答欄：
- (10) 今後の英語教育に期待することは、どのようなことですか？御希望を書いてください。(例：異文化を学ぶ時間、ペア・グループ学習、等)
回答欄：

(Appendix 2 : K 中学校アンケート調査結果)

K 中学校アンケート調査結果 1 年生

1 英語の授業は好きか				1 年生					
好き	29	1 組	28						
まあまあ好き	43	2 組	23						
あまり好きではない	31	3 組	26						
嫌い	2	4 組	29	ok					
	105		106						
2理由を具体的に									
外国人と話せる	2	知識が増える	16	苦手 (話すの苦手)	20	教師楽しい	7	発音苦手	1
かっこいい・すごい	5	海外への興味	15	英単語・スベル大変	14	得意	4	英文書き好き	1
リスニング力磨き	2	楽しい	27	話す能力獲得	16	嫌いではない	6	克服したい	2
英語を話したい	15	好き	10	理解が難しい	19	特に理由なし	1	なぜ学ぶのか	1
				日本で英語いらない	3	書く苦手	3	情報量多い	2
				将来・役立つ	12	面白い	1	読み苦手	1
				異文化理解	4	テスト・成績がわるい	2		
				達成感	1	難易度への不安	1		214
				好	1	知識が増える	2	話せるように	
				嫌	1	理解が難しい	2	英語・スベル	
3楽しいと感じる活動は		4授業以外で英語に触れようとしているか							
読む	49	意欲的に	10						
聴く	29	まあまあある	44						
話す	64	時々ある	38						
書く	34	ほとんどない	13						
	176		105						
5英語に触れるのは具体的ににどんな時か									
塾	35	you tube	10	インターネット	19	英会話	6		
勉強	9	通信教育	1	外国人	3	旅行	1		
音楽	8	本	2	movie	4	英文記事	1		
英検	2	TV	13	家族等との会話	6		120		
6理想の英語と日本語の割合		7 (6)の理由		8英語の授業で一番楽しい内容は					
1/99	1	日本語も大切	6	文法説明	1位	2位	3位		
10/90	3	理想の割合	15	新出英単語・熟語説明	3	6	14		
20/80	3	onlyはよくない	2	英作文	5	9	11		
22/78	1	英語はいや	1	アクティビティ	4	5	15		
25/75	1	授業についていけない	36	読解	24	12	9		
30/70	5	英語に触れたい	45	音読	23	26	21		
35/65	1		105	英会話	22	32	9		
40/60	22			英会話・対話	24	15	24		
45/55	1			その他	1	1	3		
50/50	17				106	106	106		
55/45	2								
60/40	26								
70/30	18								
75/25	1								
80/20	3								
90/10	1								
	106								
9もっとも身に着けたいことは									
英会話	64	語彙力	7	最低限	1				
writing	9	reading読解力	10	異文化理解	3				
listening	6	英検	16						
grammar	5	理解	3			124			
10英語教育に期待すること									
ペア・グループ活動	46	楽しさ	3	英語の割合	3	英単語学習	2		
異文化理解	24	英作文	1	native	8	英会話	2		
activity	2	授業数	2	listening test	2				
話す時間	6	文法説明	1	foreign language	4		106		

K 中学校アンケート調査結果 2 年生

1 英語の授業は好きか		2 年生			
好き	27	1組	29		
まあまあ	46	2組	33		
あまり	41	3組	34		
嫌い	12	4組	29		
			125		

2 その理由	
外国人と話せる	1 知識が増える 5 苦手(話すの苦手) 2 教師楽しい 5 発音苦手
かっこいい・すごい	4 海外への興味 6 英単語・スペル大変 6 得意 3 英文書き好き 3
リスニング力磨き	1 楽しい 14 話す能力獲得 9 嫌いでない 1 克服したい
英語を話したい	8 好き 9 理解が難しい 23 特に理由なし 1 なせ学ぶのが 2
	授業楽しくない 2 日本で英語いらない 2 書く苦手 情報量多い 2
	将来・役立つ 11 面白い 2 読み苦手 2
	異文化理解 1 テスト・成績がわるい 英語法苦手 4
	達成感 1 2 難易度への不安 おもしろくない 3
	好 楽しい 将来性 話せるように 2
	嫌 理解が難しい 英単語・スペル 話す苦手

3 楽しい活動は	4 英語に触れているか
読む 34	意欲的に 15
聴く 37	まあまあ 42
話す 73	時々 45
書く 32	ほとんどない 24

5 具体的にどんな時か	
塾 28	youtube 31 インターネット 12 英会話 11
勉強 7	通信教育 外国人 3 旅行 3
音楽 21	本 6 movie 2 英文記事 1
英検 4	TV 18 家族等との会話 6 ラジオ 3

6理想の英語と日本語の割合		6理想の割合		7その理由は	
1年生	2年生				
0/100 0 1		0 100 1		日本語も大切 14	
1/99 1 1		1 99 1		理想の割合 19	
10/90 3 3		10 90 3		onlyはよくない 19	
15/85 0 1		15 85 1		英語はいや	
20/80 3 6		20 80 6		授業についていけない 31	
22/78 1 0		30 70 13		英語に触れたい 24	
25/75 1 0		35 65 1		英語力向上 16	
30/70 5 13		40 60 14		英語を使う機会がない 1	
35/65 1 1		45 55 2			
40/60 22 14		50 50 25			
45/55 1 2		60 40 17			
50/50 17 25		65 35 1			
55/45 2 0		70 30 20			
60/40 26 17		80 20 12			
65/35 0 1		90 10 5			
70/30 18 20		100 0 2			
75/25 1 0					
80/20 3 12		30 50 1			
90/10 1 5		50 60 1			
100/0 0 2		70 50 1			

8 楽しい活動は			
	1位	2位	3位
文法説明	6	7	12
新出英単語・熟語説明	11	18	25
英作文	5	9	22
アクティビティ	64	19	7
読解	17	29	15
音読	15	18	27
英会話・対話	6	26	12
その他	3	1	3

9 もっとも身に着けたいこと			
英会話	98	語彙力	10 英単語学習
writing	11	reading読解力	12 英会話
listening	8	英検	224 異文化理解
grammar	6	理解	3 発音

10 英語教育に期待すること			
ペア・グループ活動	68	楽しさ	1 英語の割合 1 英単語学習 2
異文化理解	15	英作文	1 native 12 英会話 4
activity	7	授業数	1 listening test 1 sing a song 3
話す時間	3	文法説明	2 foreign language 1 将来性 1
海外の本	2	調べ学習	1 わかりやすさ 1 テスト形式 1
習熟度別	1	英語教育の環境	1